



「富士山にのぼる」を読んで

筑波大学附属小学校 二年 佐橋 葵花

この夏、私ははじめて富士山にのぼった。のぼる前に「富士山にのぼる」を読んだ。読み終わった時、「これから富士山にのぼるぞ」と、力がわいてきた。

読んでいるとき、本の中のページいっぱいやしんと石川さんのことばで、わたしは石川さんに富士山につれていってもらったような気もちになった。そして、はじめて富士山にのぼりはじめた時、そのしゃしんやことばがあたまにうかんできた。

石川さんは、歩く音をこうかいた。ザクツ、ザクツ、キシッ、キシッ。私は私の歩く音に耳をすました。私の音は、ガリッ、ガシッ、ジャリッ。「したした！音が！ここは日本で一番高いところにつづく道。がんばれ私この先へ。」と音を聞きながら歩いた。

石川さんは富士山はようがんでできていると書いた。私はようがンのかけらをポケットに入れた。そのとたん、大ふん火のことをそうぞうしはじめてしまった。町をまきこむ大ふん火。いろいろなことがおきたのだ。この富士山のすごい力！帰ってきてもういちどよんでみた。二回目は一回目よりなつとくしながらよめた。そして、私は富士山と石川さんの心にちかよったきがした。

この本のさいごのことば「ぼくはまた、一步をふみ出した。」のところが好きだ。これからあたらしいドアをあけるみたいなのはつげんだ。そして、あとがきに「富士山は何かわくわくすることがはじまる出ばつの山なのです。」とかいてあった。なぜか分からないけど私もそう思った。これからすごいことがおこる、そんな気もちで力が出る。わたしはまたのぼるなん回もなん回ものぼる。のぼる前にこの本をよんでからのぼる！わたしはきめた。ありがたうすてきな本を、石川さん！